



秀色  
對  
語  
五  
編  
中

49  
~遠13  
870  
14



遠門  
 840  
 卷 14

明治三十八年  
 十月十八日  
 購求

春色英對暖語卷之十四  
 第廿七回

爲永春水著

娘が...  
 一、早は...  
 うらふ...  
 釣...  
 控...  
 お八重...  
 うんが...  
 ト娘...  
 見...  
 控...  
 お八重...  
 うんが...  
 ト娘...



引込むおらもい湯屋の棧橋へ寄付つ艘の家根ぶ糸  
お菊ハ、マヤお客ごヨトのひまぐら松の中成あぐみて櫻  
葉ては當りのお客は、はるるおらうらあまぶまぐら松宿の  
着元が、はるる番と挨拶まぐら思ふとあるさ成りりとも  
うぐらふあらぬお客を見てもお葉もあらぬ人よりさても  
客も杉の間の産浦と見物のようあてけ云地へもあて  
多き六萬より初心のおもむき舟宿と娘分まぐら世の根よと  
思ひの外二見屋のお柳とのうを名ぐら、あや藝者へ乙吉

小六もぐ別て評判、宜きを撰みすて温るふと如也  
あまのりまぐらハ、奥あうくも思われけ大栄楼の娘あお首  
お夏お増おたぐら女中のおせきあうく、あそのまぐら風情を  
見聞て感心するらるるあてあうく、知うくうらぬ人あられ  
どもあ場あへるまぐらあてあられ酒の序を中せし七海の景さ  
ふらるるまぐらあ安房上總の山をまぐら富士の徳系筑多十  
葉浦、其外西南の遠山とくぐらわて教へらまぐらあおまぐら  
見ゆらもあうらぐら但し、使客の男女あら向ぬ風なうらうら

婿下ヤお力ごんお柳さんハ何様〜とぞ  
 来々〜ハ今實實ハ子 アサお柳さんハ何様までお早れ  
 りつもの様ハ我様をお言のハ今日ハお止るせ入テ何ぞも私  
お助<sub>ご</sub>マシ〜お母<sub>お</sub>マア お早<sub>お</sub>リヨウ〜 お比<sub>お</sub>越<sub>お</sub>シテ早<sub>お</sub>ク来<sub>お</sub>テ  
 様をお云とを様までお早見ト笑ひながらのハ今来りて  
 料理と好々酒をのさめ致する様をお柳と名をうせり客の  
 好々風の人お菊が如りのハと茶一〜のハハ二見屋の  
 女中もそぞろに推量し〜と急ぎ洋り初〜が程なくお柳様  
 送り来るそぞろ〜 けお柳ハ彼柳川が度ふ〜と度世松  
 佛門ふ入り厄とありま〜恩義と教らん爲ふ佛の戒を破り  
 宗次郎の貧家ハ尋ね久〜の間ま修ふ止〜ハ鬼角  
 宗次郎の病氣治り兼て彼二十兩の金も盡ひなく〜と  
 途方ふらまる時節ふありと漸くと全収〜けつがも順  
 又増々母ふハ長き煩ひ〜必死の腦〜幾度となくありけ  
 止る苦痛ふよ〜と羞申のごとくあり遊助の見も同く  
 の毒あつむが〜とあり〜お宗次郎の〜人便りもせげ

宗次布もいふに、そのま 其奥の病の治りうまき  
 所へお柳が尋ねりて二三日と再發して他を久り見る  
 のまもあつり—中ふお傍の方へお母親の數年來通ふ  
 るせ—先の丈の種ゆて産—男のみお傍のあふ流りうの  
 見源も湯とのい者尋ねりて母とお傍の大病を思はせ種  
 と世世をあり—せせ 湯も湯もを腹の都合より—おの 湯村の方に  
 後住居して在けるが當時母の極難治を捨てまに相違の  
 上母子とも被後住居引取て実意の者病を治はけぬ  
つぎの 月日を尋ねりてお柳の方へお病氣の治り—のち 後  
 お柳の男の爲に身代捨て再度の勤め六二見屋七十七  
 西の給金ゆて唄女とともあり—おの 湯屋の娘か  
 お菊がとちりちて産痛せう—おの 向ひお柳のあまも  
 他國をさるかり—おの 家さんよくおまごわつひあまら  
 宗次布の衣裳のま流るるを情と見直して—おの 七  
 予のまらう後お柳の都合のり極ふありま—おの の久しお柳  
 おくつて嬉し—おの のまらうけきどもお柳様がまけけ

おの 湯屋の娘か  
おの 向ひお柳のあまも  
おの 家さんよくおまごわつひあまら  
おの の久しお柳  
おの のまらうけきどもお柳様がまけけ



獲のりもあつて一七おどろと又がー氣もあつて後  
トシバ定次并に完ぶ愛ひ 家ナラ一七まはは案ト  
さんふ兼てお茶の頼りの通りけ身のおどろく 約束を違て  
あつたのうれでも 世間人あつて一七まははあつた  
幸勝一七定次も信もはまの時常頼成見の極ごと案ト  
あつたけでもおどろと案トがあつて両方があつたあつた  
切て居る一七おどろく一七おどろけけ身あつて極て居る  
金で衣裳を着るの 酒落るのとりあつたはねハナ 柳一七サ

衣裳をとり一七人の入道か買けまどまどまどまど  
おどろおどろと松を極一七逢は居る甲斐があつたサ  
ア二何極るおどろく一七おどろけまどまどまどまど  
のりも今日まどまど一七おどろくも悦びせるまどまど  
おどろまどまど一七ト懐中一七扇巻と一七魯紙巾の山菊の  
紙と抱えおどろけ 金をあつて 家一七サ一七まどまど  
おどろまどまど一七おどろけ一七残つてお茶の山菊の  
一七二十兩あつたけ極るまどまど一七柳一七おどろけの方の

夏よりうらお花様家業の都合は徳のたあをまほら 家一エ  
 高貴いまごま分利もまひけまごま 何れもお花を  
 初し七さのが親よまひてく ちるまひらうの平鉄で引ひ  
 ろく返戻極る夏候し七はも早く けねふまごまひと  
 思入仲ふ丸 家で進めらまて 花柄の天神さるの當  
 のれを買つてく 柳一花をまふでも當つこの下美  
 ぶらりり 家一エサ千両のふ當つこのヨ 柳一花  
 お言は成る何れし七さ極まごま 家一エサうそぢぢぢ

福入ナそまごけまごも丸れを買つこのをまひらうこり割  
 だけの金づるナ 柳一花 實正ふ人 家一エ 左極サ七まごま  
 二百八十兩さうづり極まごのヨ 柳一花 嬉ふねをそれら  
 直ふけ方へまごも異まごの久 家一エ 當り番付のまご第  
 直ふ来て 思入と 思入しけまごも 金を積取まひ中へ何れ  
 間遠川で 樂しむふさせし 甲斐もまひ極よまごまひらう  
 まひものでもまひと 大のをまごまご ちもままごまご今  
 金を積取と直ふ欠けし七まごまご け場ぢつ思入まごま



あつが七きとて番當てううお茶を本宅へ連れて来ようふ  
せうう商ひの方ハ多修めそお茶後おまのそお茶は後  
その相残を付振ぢやうあひう 柳「ナクニ何程でモウ私やア  
け云地へ来さもんぐうう鬼てものまふて及んぬぐ  
全盛歟一とうう他人あも嬉しうせそお茶家でも嬉  
がるらうふ金もまあけさせそ引込及ヨまるお茶様も  
新茶家業の新で折角お金ぐふに遠入このごふ幸防  
柳「私ぐ側ふ居るううとりうて商賣の物たふらう

て入行るハヨ私ハまさ死んご氣ふううてまがりの月日ハ幸  
防してお茶様の種を承果ふ堪るううそ氣で家藏の  
都合をよく成成まとの時家次布ハお柳の身で自若  
旅めて居る 柳「アサ何ごね私のううまの返りもお茶を  
あつて何そ白服付ておまきううごん 家「ナニ白服付ハ  
はらひが久しううで逢ううまご別居の義累く見入る  
うう子簡が遠のて来このサとて髪がトウくまねふ  
徳ハまる柳「早く廻りマ 柳「ナニまご書ヤううドで

聖あるのせむりまはく 宗一左衛門 何れも七もお茶の  
女風の方が 似合極ごあつらんの節よりうまか人か  
ぬらふらん 宗一アサキ極まをせお言てさひたえ  
誰が何とつて異極ともモウしく何れも七もお茶様で  
一生苦勞分はまる覚悟を居まはくう善悪をうごこ  
つてお笑ふものヨ 宗一三歳まで形して並みのう 宗一アサ  
そまが幸助でありまはく子 宗一何れも七も幸助がある  
めら 宗一アサキ極ま 宗一エ 宗一幸助 宗一お茶の極ま

まらぬ 宗一お茶様とらる極ふして精玉してお茶成ヨト  
いと睡ししくうひける

第廿八回

再説宗次宗六の御く小徳律直とて高ひも御目一再問の  
宗一 宗一お茶様とらる極ふして精玉してお茶成ヨト  
二百兩余の金子を借て彼お茶の許へつらう 宗一お茶様  
を励まはくまはく 宗一お茶の御ふよりうまも増香の  
方も極まはく義理の御ふよりうまも増香の 宗一お茶様

あつども鬼角ふらうをうけて只母子大海の性命を近所  
あておつくるのこゝろ申ふ極者のたうらひあて田舎を引さる  
しつこく焼くあつおとらふ者をもつりおまはりよく案じら  
まども詮方なくまづ思ひまゐる金まふけの筋あはる野  
の方へおもひまき山を買て杖をさ切ぬきまふらうを被理の  
兼てようり少得くる所あつる思入通り直ちより獨  
余村のよき杖を切ぬき切ぬきけまづ大まふよまふ高より杖  
目かく川曲一の差圖をもたうらひて其身ハ只一人あて序を

あつども鬼角ふらうをうけて只母子大海の性命を近所  
あておつくるのこゝろ申ふ極者のたうらひあて田舎を引さる  
しつこく焼くあつおとらふ者をもつりおまはりよく案じら  
まども詮方なくまづ思ひまゐる金まふけの筋あはる野  
の方へおもひまき山を買て杖をさ切ぬきまふらうを被理の  
兼てようり少得くる所あつる思入通り直ちより獨  
余村のよき杖を切ぬき切ぬきけまづ大まふよまふ高より杖  
目かく川曲一の差圖をもたうらひて其身ハ只一人あて序を  
讀んとせうけりが途中にて目の着きうらうけりバツ  
て柴又村へうらうけりや黄昏て田舎へ耕作する  
人もあつねらうらうけり群鳥あつるふらうけり遅まゆ  
哀さふ見あつ折しもあまは時程よりうけありけん  
二人の悪漢横路より市後ふまふさぐり一ツ道を通  
あつ酒代がうらうけりへんふらうけり懐中の金を取  
けりトまうらうけり家次郎びつらうけりが氣を励す



働きたるほど二人と一人の家やとまをまじぶ家次希一危く  
あるまふ度くありしが一髪叫んで切込む白刃眉ををを  
まて二三寸まると流る血涙のまをを見るより一人も氣力奪  
まひる心透るに家次希一行見ふまて逃むせむを逃まか  
赤穂者の二人を二巻三小退くくる家次希もまろく小再渡の  
勝負の思ひもまろく命くらうら一里外をうりふたどく  
向ふの方森のまふ芽の家根七八分見入ける由ある結く  
走る分は家次の明る家をまひあを便りよたびが親を

張お合ふ第と八邊の心のゆる小勝をあげて表居小尻  
突撥ふどどと倒して起るまふけ家の内ゆも驚天一居不  
を飛退く一人の女 女アエ兄さんりくト呼喚固て家次  
希一親のまふ思の流くと遠記て 家ア、モシク何もお教ふ成  
者でいごころませんゆ卒あを一杯吞てお長とままの思  
漢小史合て逃てまふこのまてお家へ逃惑をまま申す小察  
ませんトのまも昔一息切目の格も風情とま言教めをまあつるを  
推量すまごゆ断をまける場をま一平遠くうら 明るに



透一きりつ 女今更をよまうらうろ多き所へ腰でもお蔵  
成ヨトの小物ぐら敷るるの當れ音のうらうらき夜半の  
安月で芽家の住居ふくらぬ風俗多虎ふろを汲まり  
行ふに燈火せさう中きりつ怖く水せ盆不載て 女サカお上り  
成まう一やお蔵さん八家さんでぶらぶらまはる 五左衛門お蔵  
ハ増着ごままけお蔵七多け所は 女私よりうお蔵さんさ  
お蔵七け所へお出成成このてぶらぶらまはる人さけけ方へよ川で  
お兵成成お蔵さんお蔵さんのまはれお蔵さんサカらうアサを

考へてお兵成成いご後今夜おんぞお蔵さんがあふお蔵  
であらふと六思ひませんうら今日八母のまんがお蔵さんの安  
否をお蔵さんお蔵さんお蔵さん一六サけ間人お兵成成お蔵  
お蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さん  
だうお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さん  
お蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さん  
だらうらと考へて居まはる六今多お蔵七け所へお蔵さんで  
お蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さんお蔵さん

よろしー見て 増しーこ月の所ゆも血が溢して居まひ  
氣業のよろしート四も我見廻し 増しー何行も怪我せは  
のぢやア有ませんか 秘ト業ト七宗然帝の顔をかろも猶身  
を吐バ 家トシー切らまひ 覺入もア 怪我もあひ 積りぞ  
トテ身沈り入りて 増しーあーひぢーかろるまはらうられ  
たヨトあまらう 盗人ふれ合らう 始終切短けて逃来りーと  
まだをろろくくろろ 懐中ものあぢを取びて改め 丹  
ひどい目小逢らう 怪しきまじもわらわおら 且ばお海らあ ぬらぬら

不思義トヨ 増しーさぞ怖ろむまじもわらわらふ人ばあひま  
歳とあたまんハ 室おま業 増しー男のて居まーこのふ二人  
あんどまトウー 切合まが 出来まーこね 飯術を習てあ  
あまら 増しーとーとー何を知りて居るものうと切合  
あんどまひとま 妙お働ひて 甚居を見る 秘おま流るま  
とあひまららうろく ぞ 秘おままア ね人 増しーまア 支でも 助ハ  
盗賊 ぞろろ 則 秘身で 出まーしーらふのふ 宗ト 秘お 七そん  
ま流る 盗人 ぞろろ ぞろろ のらん の 出来合の 逃来りーん





おのの者の世落とてけ所不致仕居するのを見津湯と  
りふ者當將浪人中のちのさる目づ物入すひるさ振ふ  
かる田舎の母子三人時節成清海氣もやうく七月  
必来全收して今日久しうあて湯も入らるは成  
きけまぶ家次并んやうや安場の思ひをまうまてその  
身の上のまへにわがうくをう一國せ當將えくとは  
合も直るんき次身成きつれどもお柳のまへにまはふ  
明うねて陽一居うう一が實一年余りの別居うう一

おのの世 野風お吹送ううきそもの淋くまううがねの波一舟成  
呼聲木精おひびき七喜くまううあんくことあそりの小ける  
坊 ちや私ハ先刺うう氣が付き一えんががお前孫空腹のあり  
ませんう人 家ハチニ松戸でお一早ううけけまじも夜合をま  
か合ううう腹ハ城おひが先刺の一件で室小旁まじ目  
ニ左格でううのませうね人まじまじやマウ直小お体マシ然の  
まうる私ガ屋でまじまじりまじまじうう左格を成ううははは

お草臥くさぶれが寝ねまけせう 家いえアアとまぢぢぢ 寝ねくくてののららふが  
草臥くさぶれの寝ねくくよよららううカカが寝ねくくひひけけままぶぶりり 坊ぼうアアヤヤななせせで  
ごごううののままははまま 家いえエエ左さ松ま老ら実じ小せ圓えんととててののみみせせ 坊ぼう  
ととままじじららううててもも何なんじじううままりりまませんせんううららササととままののよよひひがが夜や具ぐ  
何なん様ようも 家いえアアととままぢぢぢぢままひひ紀きせせ甘あまだだととも 家いえのの寝ねのの方かたごごままのの  
方かたでも 邪よこ子ごみみららううのの所ところへ 寝ねくくて 暑あつままぶぶりりなな 坊ぼうアアヤヤ  
鬼おにのの邪よこ子ごみみららううままははままぶぶりりののままははまま 家いえアアととままぢぢぢぢままひひ紀き  
ごごも 早はやく 寝ねくくて 七しちららんんぢぢ

